

平成26年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)
実施報告書

HT26090

【プログラム名】 展覧会をつくろう！！ 日本画の魅力と学芸員のしごと



開催日： 2014年8月22日(金)
実施機関： 東海大学
(実施場所) (湘南校舎17号館2階ネクサスホール)
実施代表者： 篠原 聡
(所属・職名) (課程資格教育センター・准教授)
受講生： 小学生15名、中学生13名、高校生6名
関連URL：

【実施内容】

1.プログラムの目的

わが国には誇るべき日本画の歴史があります。日本画という名称は、明治以降に西洋画と区別するために使われるようになったものですが、日本画の伝統は、素材や技法、精神性にいたるまで過去から現代に脈々と受け継がれています。

このプログラムでは、次世代を担う子どもたちに、学校教育のなかで学ぶ機会の少ない日本の伝統的な美術である日本画の魅力や、日本美術の情報発信の担い手である美術館学芸員の仕事を体験的に学んでもらう機会を設けました。

2.プログラムの実施で留意、工夫した点

プログラムは2部構成とし、講義を受けてからワークショップに参加することで、体験学習の学びを深め、受講生の集中力を持続できるように工夫しました。

第1部の講義「学芸員の仕事と日本画の魅力」では、研究成果をわかりやすく伝えるために、美術作品が作られた歴史や背景を調べたり、LEDライトで照らして作品の状態をチェックするといった学芸員・研究者の仕事を、「探偵」や「医者」に例えて紹介しました。デジタル温湿度計や照度計、演示具などの使用方法も実演し、実際の展示業務のイメージを持てるようにも工夫しました。

第2部の体験ワークショップでは、受講生の自発性を促すべく、選択形式の2つのプログラムを用意しました。①「豆うちわで日本画にチャレンジ」では、同様のワークショップを美術館で実践してきた副館長、学芸員、日本画家を実技担当者として招き、肌理の細かい指導ができるように配慮しました。また、時間内に豆うちわを完成できるように、画材等の事前準備に配慮した他、事前に受講生に連絡して描く題材をあらかじめ用意してもらいました。②「ミニチュア模型で展覧会をつくろう」では、ミニチュアの展示ケースと絵画模型(1/10スケール)を用意し、学芸員の展覧会の仕事の一端を体験的に学ぶことができるように工夫しました。受講生が自ら考え展示にチャレンジできるように、ミニチュアの壁面はスチール製、模型をマグネット式とし、取り回しも容易にしました。



講義の様子



体験ワークショップ ①豆うちわで日本画にチャレンジ！！



②ミニチュア模型で展覧会をつくろう！！

3. 受講生の活発な活動を促すために工夫した点

受講生とのコミュニケーションを重視し、一方的な知識の伝達だけではなく、双方向的な学びの場を実現できるように心がけました。

講義では、実物の作品を用いてクイズ形式により鑑賞のポイントを紹介しました。また、掛軸を展示して日本画の支持体(紙・絹)の違いを受講生それぞれに間近で目視確認してもらうなど、受講生の自発的な行動を促すように配慮しました。

体験ワークショップでは、実物資料や模型を用意し、受講生の興味関心を引き出せるように工夫しました。①のプログラムでは、普段接する機会の少ない伝統的な日本画の材料を紹介し、日本画がどのように描かれるのかの実演も行いました。受講生が制作した豆うちわをお土産として持ち帰ってもらうことで、プログラム終了後も受講生の日本画体験を家庭内で共有できるように配慮しました。②のプログラムでは、高精細の小型CCDカメラを用意し、受講生がつくったミニチュアの展示会場を映像として捉え、実際の美術館の展示空間さながらの臨場感と視覚効果を得ることができるよう工夫しました。

昼食やクッキータイム時には、学芸員、研究者、学芸員課程の学生と受講者との交流の場を設け、意見交換の促進を図りました。ワークショップ実施中も各グループにスタッフが関与し、制作や話し合いが活発に行われるように配慮しました。

プログラムの最後に、希望者で学内の博物館施設のバックヤード見学ツアーを行ない、学芸員が働く博物館の現場や業務内容の具体的なイメージを持てるように工夫しました。



支持体の違いを確認・ろうそくの光での鑑賞体験も(講義) 岩絵具や膠、胡粉など日本画の画材を学ぶ(ワークショップ)

4. 当日のスケジュール

10:00-10:30 受付

10:30-11:00 開講式

挨拶(課程資格教育センター所長・山本和重)

オリエンテーション(課程資格教育センター・篠原聰、研究支援課・清田拓也)

科研費の説明(研究成果の社会還元・普及事業推進委員会委員・氣賀澤保規)

11:00-12:00 講義「学芸員の仕事と日本画の魅力」(講師:篠原聰)

12:00-12:20 「日本画の画材・表現について」(藤沢市民ギャラリー学芸員・小林絵美子)

12:30-13:30 研究者・学芸員と一緒に昼食

13:30-13:40 体験ワークショップの全体説明

13:40-15:00 体験ワークショップ(グループにわかれて①②を実施)

①豆団扇で日本画にチャレンジ!!

②ミニチュア模型で展示会をつくろう

15:00-15:30 クッキータイム(研究者・学芸員等との交流、講評)

15:30- 修了式(未来博士号授与、アンケート記入、記念撮影)

15:45 解散

16:00-16:30 希望者のみ実施者引率にて松前記念館(東海大学歴史と未来の博物館)バックヤード見学ツアー



修了式 未来博士号授与



最後に全員で記念撮影

5.事務局との協力体制

事務局で委託費の管理や支出報告書の確認、日本学術振興会への連絡調整、提出書類の確認・修正等を行っていただきました。また、物品購入、協力者・アルバイト学生への謝金、受講生の保険加入等の事務手続き、学内関連部署との連絡調整、会場の設営、アンケート集計などの協力を得ました。

6.広報活動

事務局と連携し、近隣の小中学校を中心にチラシ・ポスターを配布しました。また、大学の一貫教育課や広報課とも連携し、付属学校や学内博物館施設へのチラシ・ポスターの配布、掲示、大学HPへの募集案内の掲載を行いました。後日、プログラムの実施報告も大学HPに掲載しました。

7.安全への配慮

本プログラムの内容では、受講生に危険がおよぶ場面は想定しにくいと考えていましたが、万全を期すべく、安全面における具体的な配慮・対策として、ワークショップの事前および実施中に、日本画の絵具には天然の素材が含まれるため、直接手で触れるとアレルギー反応等を引き起こす可能性があることを周知しました。また、受講生、協力者、アルバイトについては、大学側で傷害保険に加入いたしました。

8.今後の課題、発展性について

アンケート結果から、参加者(小学生、中学生、高校生、保護者)から好意的な意見、感想を頂き、充実したプログラムが実施できたと感じています。学芸員資格を目指す学生に、スタッフとして子どもと接する機会を提供できた点も貴重な成果であったと思います。今後の課題としては、体験ワークショップ①②の両方を希望した受講生がいたので、制作の時間配分や①と②のプログラムの関連性にさらなる工夫が必要であると考えます。

プログラム全体を通して、子どもたちが、普段あまり接する機会のない日本画の魅力や学芸員の仕事の醍醐味を実感する有意義な機会になったと考えます。

【実施分担者】

なし

【実施協力者】

5名

【事務担当者】

高橋 久美子 研究支援課・係長